

エルス「科学と哲学の森」 2022年8月28日（オンライン）

# 言霊の新解釈～言と事と霊

棚次正和（京都府立医科大学名誉教授）

ふだん私たちが外に発する言葉（外言）や  
内に想う言葉（内言）によって、  
私たちの世界が織り成されている。  
その自分や他者が外に発した言葉や  
内に想った言葉を、空気のように吸ったり  
吐いたりしながら生きているのである。

**言霊**とは、そのように世界を織り成し、世界を  
創造する力を持つ言葉の働きを指す。



20191008-DAO\_0085  
idis.dao@msa.hinet.net  
by Chen Liang Dao

# 内容

- 1 言霊に関する予備的考察
  - (1) 言霊の辞書的規定
  - (2) 江戸後期の国学者の言語観
  - (3) 視点の転換—「原始信仰」から「原始事実」へ
- 2 言葉の原初的機能—意思伝達か、世界創造か
  - (1) 言語に関する基本認識の枠組み
  - (2) 日常言語の定式
  - (3) 言霊の定式—「言 = 事 = 霊」
  - (4) 言事未分、言事分離、言事分裂、「幽り-顕し」の視座
  - (5) 「言の葉」言霊と「言端」言霊
- 3 言霊に於ける「言葉の発生」と「宇宙の創成」
  - (1) いろは歌、ひふみ祝詞、カタカムナのウタヒ
  - (2) 古事記、古史古伝の「神話」



# 1 言霊に関する予備的考察

## ■ (1) 「言霊」の辞書的規定

言霊(ことだま)とは、「言葉に宿っている不思議な霊威。古代、その力がはたらいて言葉通りの事象がもたらされると信じられた。」(『広辞苑』、岩波書店、1976年、816頁)

言霊(ことだま)とは、「言葉に内在し威力を発揮すると信じられた精霊をいう。古代の日本人は呪文のようなひと続きの有意味的詞章に精霊つまり言霊がひそんでおり、これを唱えるとその言葉の表現しているとおりの結果が現われると信じた。これが言霊信仰で、アニミズムの一種と考えられる。」(『哲学事典』、平凡社、1971年、506頁)

言霊(ことたま)とは、「言葉の持つ神秘的な力。…▽人間にタマ(霊力)があるように、言葉にもタマがあって、物事の実現を左右すると未開社会では強く信じられている。そこでは言葉と事との区別が薄く、コト(言)はすなわちコト(事)であり、言葉はそのまま事実と信じられている。例えば、人の名は、その人自身と考えられるため、異性に自分の名を教えることは相手の自由に身を任せることを意味する。…」(『岩波古語辞典』、岩波書店、1974年、502頁)

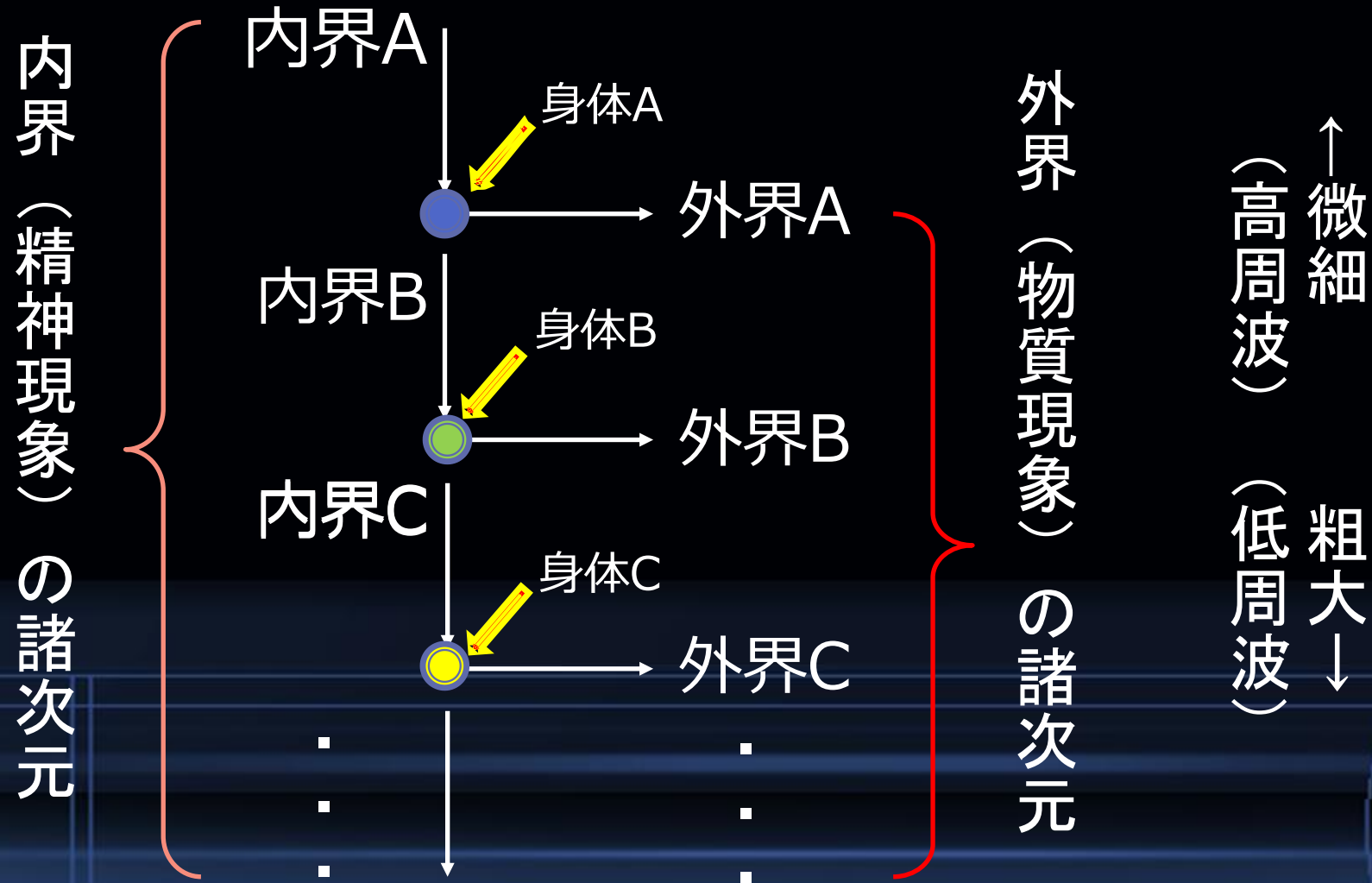
※山上憶良の好去好来の歌「…そらみつ倭の国は皇神の厳しき国 **言霊の幸はふ国**と語り継ぎ…」(万葉集、巻五 八九四)

- 「言葉が発せられるとその内容が実現する」「言葉が現実の出来事をもたらす」という原始信仰と見られている。
- 「現実」の世界は、物質現象として感覚的に知覚する「**外界**」と、精神現象が生じる「**内界**」の双方を意味する。「夢現(うつ)つ」という時の「現(うつ)つ」。
- ⇒ 言霊とは、言葉が内界を創り、外界を創るということ。
- 言葉が内界を創るとは、心の働きである思考(知)・感情(情)・意志(意)に於いて、その心模様を言葉が様々に織り成すということ。
- 言葉が外界を創るとは、感覚的知覚として広がる外界には言葉の造形力・影響力が及んでいるということ。
- 言葉による現実世界の創り方には、精神現象や物質現象を**分節**する場合と、それらの現象そのものを**構成**する場合の二通りがあると思われる。

**分節**：質料に押し当てる形相・鋳型、 **構成**：質料と形相が一つに融合・合体



# 内界と外界の関係のイメージ、両界の交点に身体



## ■ (2) 江戸後期の国学者の言霊観、「言 = 事」の等式

国学者たち(契沖、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長ら)は、日本文化の理想を古道に求め、古言の分析を通して古事の本質を究めようとした。大和心(大和魂)の憧憬・復権 ←→ 漢意(からごころ)

音義言霊学派の人たち(鈴木胤、平田篤胤、大国隆正、堀秀成ら)は、古言の考察を通して、一音が内蔵する一義に着眼し、五十音が宇宙全体を構成するとする言霊宇宙論を唱えた。五十音図は、宇宙全体を産み出すマトリックス(母胎・鑄型)と見なされた。彼らが言霊を論ずる際に訴えたのが、言は事であり、事は言であるとする「言 = 事」の等式であった。

〔言 = 言葉(発話、書字)〕

〔事 = 自然的受動的ななる事「出来事、事態」←→人為的能動的ななす事「行為、行事」〕

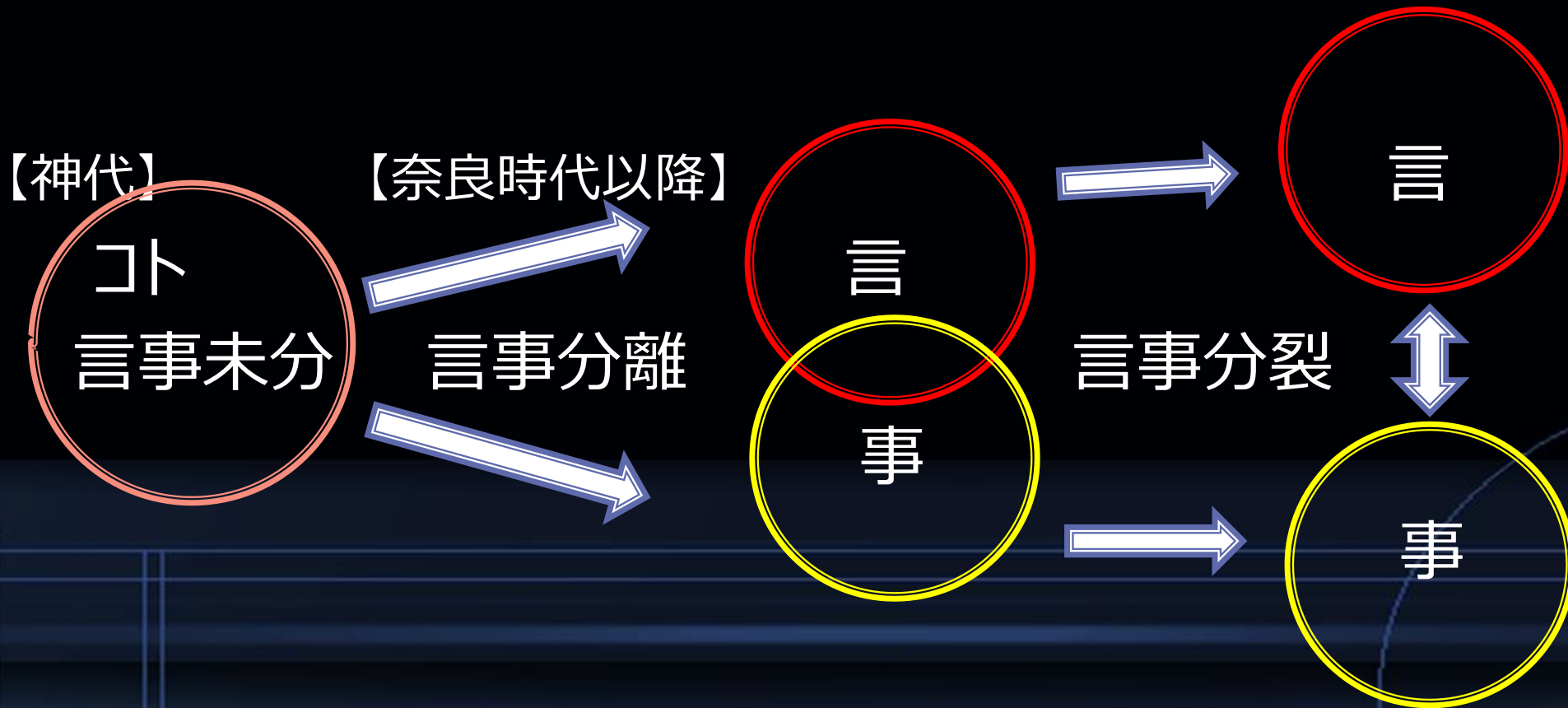
その両極の間にある中立的な「事柄、事実」

● 言と事が未分の状態を、仮に「コト」と表記しておく。その世界を象徴するのが神代の世界。

言事未分 ⇒ 言事分離。言事不一致、言事一致(言 = 事) ⇒ 言事分裂(言 ≠ 事)

言事一致が「まこと(真言、誠)」と尊ばれ、言事不一致が「かたこと(片言)」と蔑まれた。

- 言事未分、言事分離(言事不一致、言事一致)、言事分裂





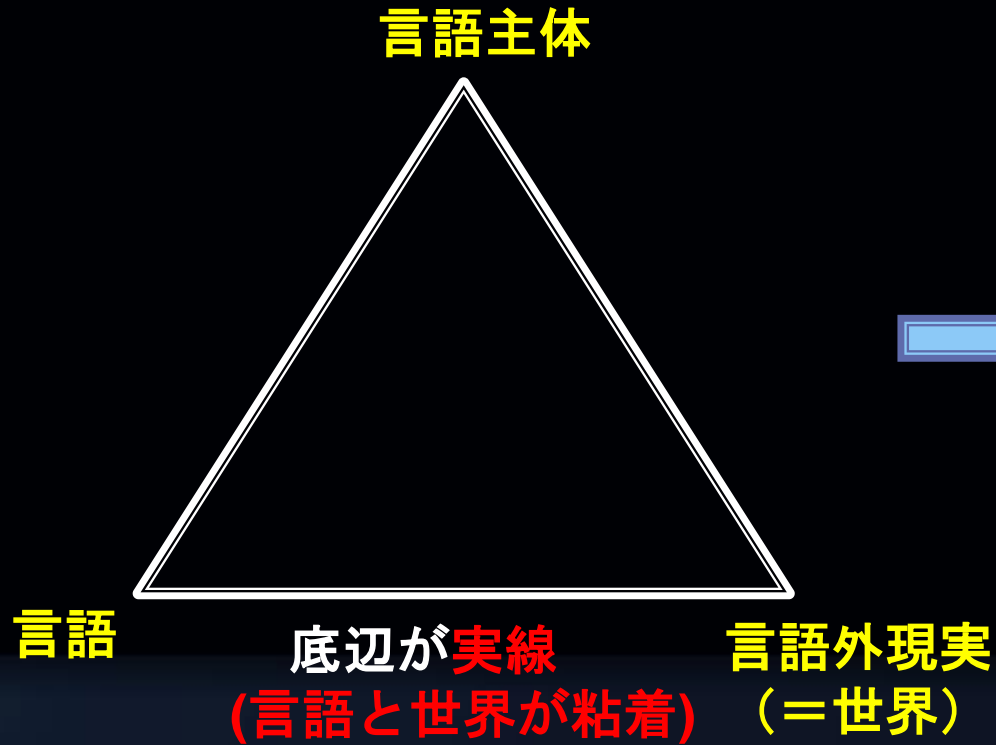
### ■ (3) 言霊を捉える視点の転換—「原始信仰」から「原始事実」へ

言霊を「原始信仰」ではなく、「**原始事実**」と捉え返す。

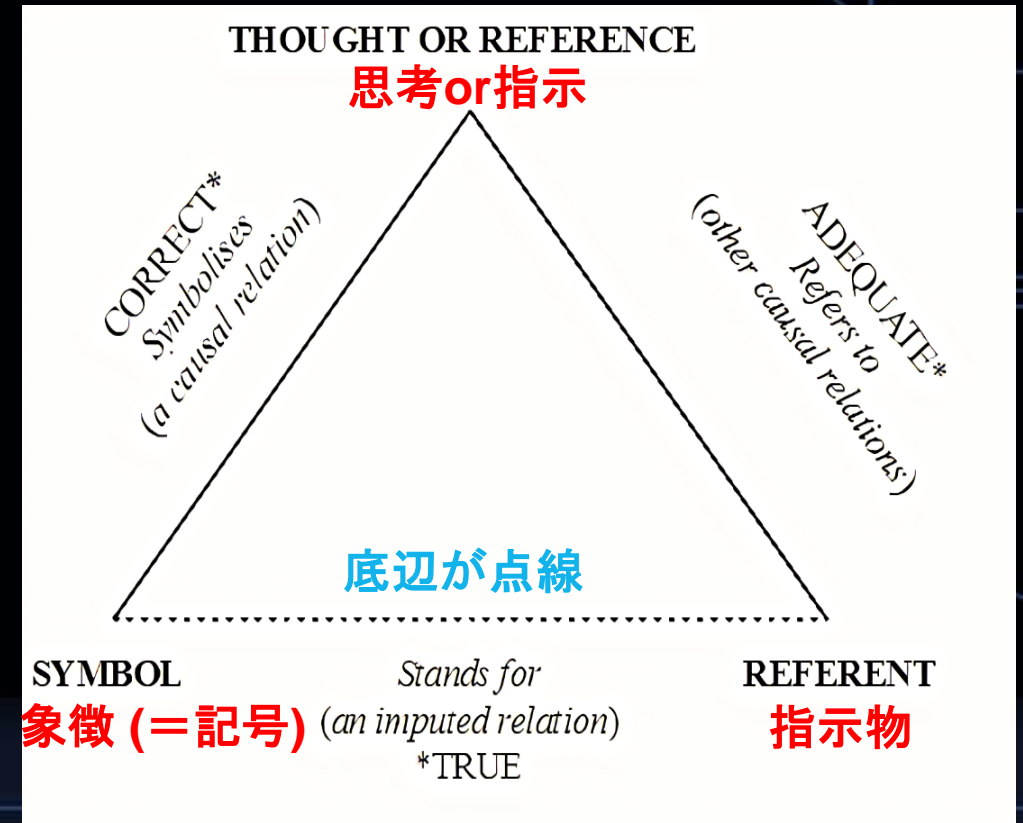
「原始(primitive)」の意味を、歴史的な視座から**存在論的な視座**へ転換する。 ⇒ 「原始」の時を 過去・現在・未来へと流れ去る水平方向ではなく、上から下へ(内から外へ)解き放たれる垂直方向で捉える。それは存在論的な意味での時の原点であり、**いつでも、どこでも、誰にでも普遍的に該当する時の始源**に関わる事柄である。神道でいう「**中今**」(なかいま、ここいま)、ゼロ・ポイント・フィールド(真空場)。

「原始事実」とは、事実をして事実たらしめ、事実を根本的に条件づける根拠に関わっており、それに拠らずしては事実が成立しえない、**事実を産み出す母源**となるものである。そのような原始事実として言霊を捉え返すとき、それは**言葉の原初的機能**を問う地平が開かれることにもなる。事実の始まりと言葉の始まりが、同時に一つのこととして成立する。

# ■ 原始信仰的な言語観と合理主義的な言語観



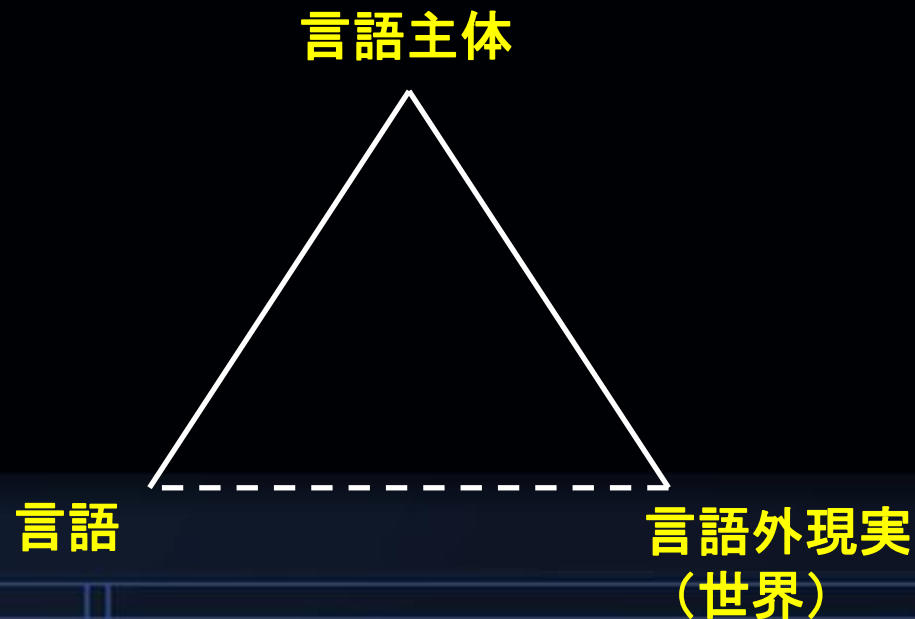
【原始信仰的な言語観】



【オグデンとリチャーズの意味の三角形】

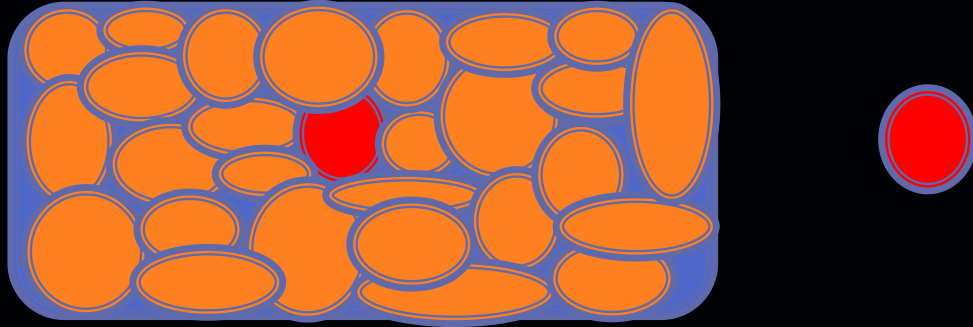
## 2 言葉の原初的機能～意思伝達か、世界創造か

### ■ (1) 言語に関する基本的な認識枠組み



オグデンとリチャーズによる「言語主体(思考)－言語(象徴)－言語外現実(指示物)」の三項関係の着眼は、記号を思考と無縁なものとする**行動主義**や、記号を心的過程との関連でのみ扱う**内観の心理学**、あるいは言語外現実を括弧に入れて言語を差異の体系と見なす**構造言語学**に対して修正を迫るものであり、また言葉と事物との間接的関係の指摘は、言葉が記号の役割を超えて事物に粘着する**原始的言語観**の解消を狙ったものであった。

- ソシュールは、言語体系を「差異の体系」と捉えた。  
(ある記号は、他の記号との相対的な対立関係の中でのみ意味・価値を持つ。)



$$\text{記号}(\text{signe}) = \frac{\text{意味されるもの}(\text{signifié}) : \text{概念}(\text{concept})}{\text{意味するもの}(\text{signifiant}) : \text{聴覚映像}(\text{image acoustique})}$$

記号(signe)は、sé と sa が結び付く関係が恣意的である。

象徴(symbole)は、sé と sa が結び付くの関係が自然必然的である。

言語主体

語用論(pragmatics)

統語論(syntax)

言語

意味論(semantics)

言語外現実  
(世界)

【三項関係図】

言語主体A

言語

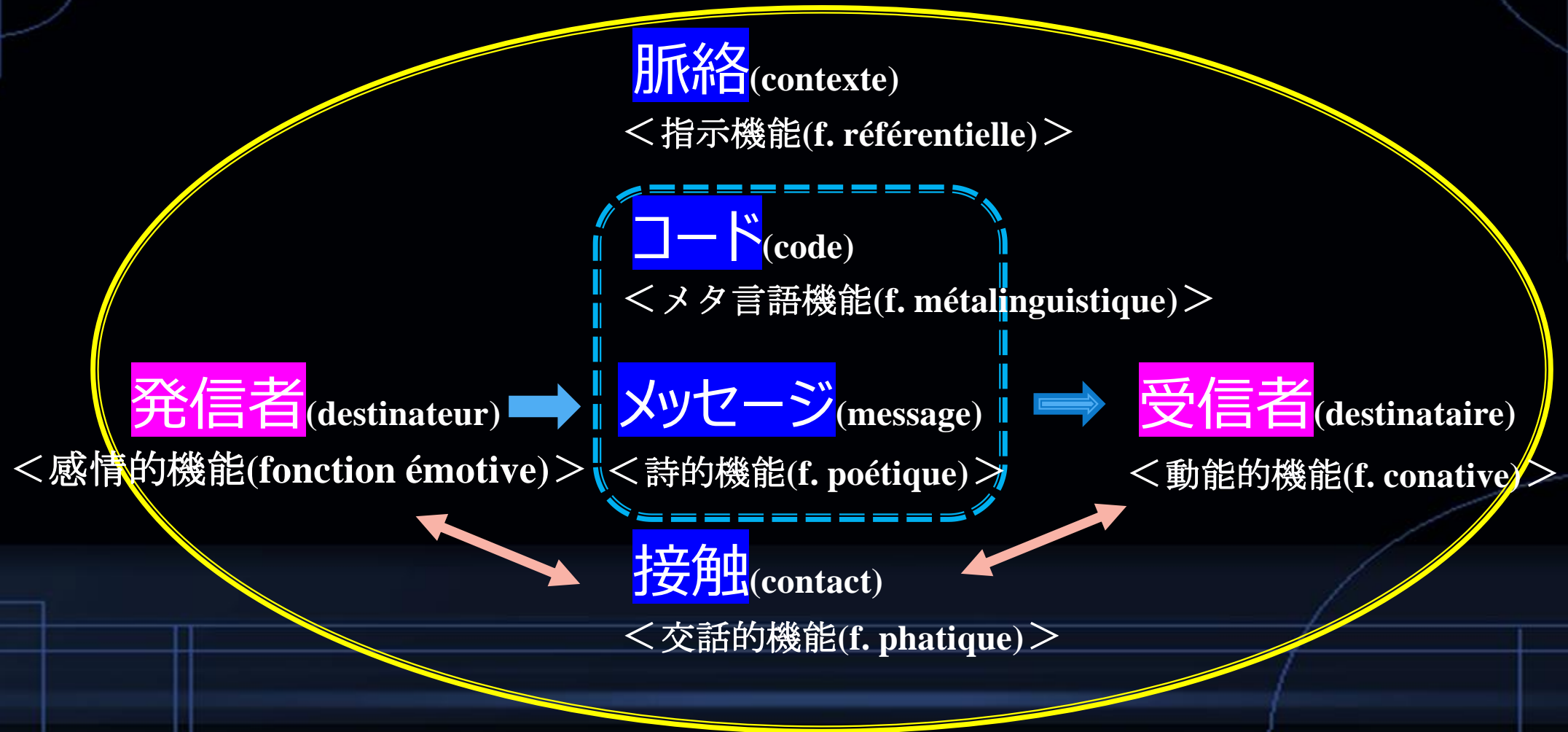
言語外現実  
(世界)

言語主体B

【四項関係図】



■ R・ヤコブソンによる言語伝達の六つの基本要因と六つの言語機能



## ■ (2) 日常言語(意思伝達communication)の定式

「誰かが、誰かに、何ものかについて、何ごとかを語る」

言語主体Aが、言語主体Bに、指示物（指示対象）について、述定する。

【主題・主語】

【述語】

(感情的機能) (動能的機能) (指示機能・詩的機能) × メタ言語機能 × 交話的機能

既存の観念や事物に関して、それらに符牒を貼って指示して述定する。

日常言語—日常世界で母国語・常用言語として使われる言語

詩的言語—文学や夢・深層心理や神話などに現われる象徴的な言語

概念言語—学術的研究で使用される厳密で明確な意味を持つ言語

宗教言語—有限相対の実存(人間)と無限絶対の存在(神仏)の関係に関わる言語

- **言霊**の場合に、日常言語（意思伝達）の定式「誰かが、誰かに、何ものかについて、何ごとかを語る」が、どのように変容するか？
- 「誰かが、誰かに」という言語主体の契機は、後景に退くか、消失する。**言語主体の自我性が消えて、無なる靈性(無我無心)が開かれる。**
- 「何ものかについて、何ごとかを語る」という指示・述定の契機は、**その無なる靈性の場に於いて、新たな物事の出来を示すものとなる。**新たな物事の出現は、一方で旧来の世界に於いて現われた「世界内存在」の事柄でありながら、他方で全く新たな「世界開示」の局面をも同時に合せ持っている。
- 芭蕉の言葉「物の見えたる光、いまだ心に消えざる中にいひとむべし」（服部土芳『赤冊子』）
- 物慣れの地平を破る「物」が出現し、見慣れたり聞き慣れた「事」が新鮮な驚きを伴う「異なり」となる。意思伝達の場合、「物」は指示対象(主題・主語)となり、「事」はそれに関する述定(述語)となるが、言霊が働く場合、新たな光の下に「物」が出現し、新奇な「事」が生起する。つまり、言霊が発現する度に、新たに「物事」が出来し、世界が再創造されるのである。
- 「もの」は具体的不変的な実体を指し、「こと」は抽象的可変的な関係を指す傾向がある。

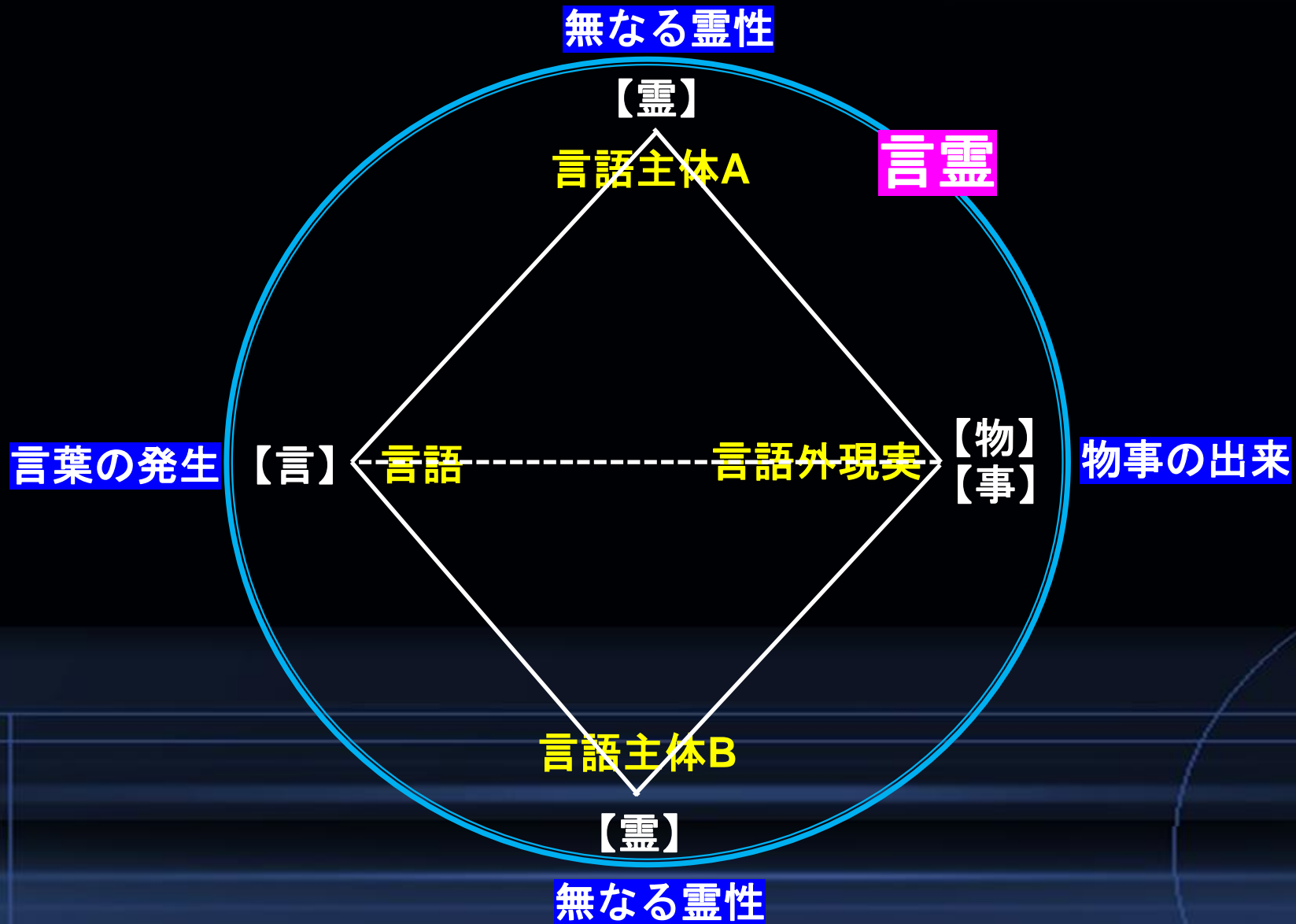
### ■ (3) 言霊の定式—「言＝事＝霊」、「無なる霊性」に於ける「言葉の発生」と「物事の出来」の同時成就

言霊は、言葉に宿る霊威を指すだけではなく、**無なる霊性の場に於いて、「言葉の発生」と「物事の出来」が同時に実現する**のであるから、単に「言＝事」が成立するだけではなく、その**無なる霊性をも含めた「言＝事＝霊」が成立すると解される。「言＝事＝霊」の三項円融が成立することが、言霊の働き**ということである。

言霊に於いては、「誰かが」、「誰かに」の契機は消え失せて、言語主体が無なる霊性の場となり、既存の指示対象ではない「何ものか」が突然眼の前に現われ、「何ごとか」が異なりの様相を呈するという**「物事の出来」**が、**「言葉の発生」**(「語る」契機)と同時に成就する。指示と述定(何ものかについて、何ごとか)の契機は、物事が出来する契機、あるいは物事が創造・再創造される契機へと変換される。言語主体が消えて無なる霊性の場に、言霊が働いて、新たに物事が創造される。これはもはや既存の物事に関する意思伝達(communication)ではなく、その都度新たな**世界創造(world creation)**と言うべき事態である。

言霊の**非記号性** ↔ 言葉の**記号性**

■ 言霊、「言 = 事 = 霊」の三項円融





## ■ (4) 言事未分、言事分離、言事分裂、「幽り-顕し」の視座

言事未分、言事分離、言事不一致・言事一致、言事分裂の事態を日本古来の世界観の一つである「幽り-顕し」の視座から眺めてみる。

「幽(かく)り」

幽り世・幽り身

← →

「顕(うつ)し」

顕し世・顕し身

神々

死者・祖先

あの世・他界

夢・非現実

狂気・異常

無意識・潜在意識

過去未来

(幻想・架空・不可知の事柄)

人間

生者

この世・現界

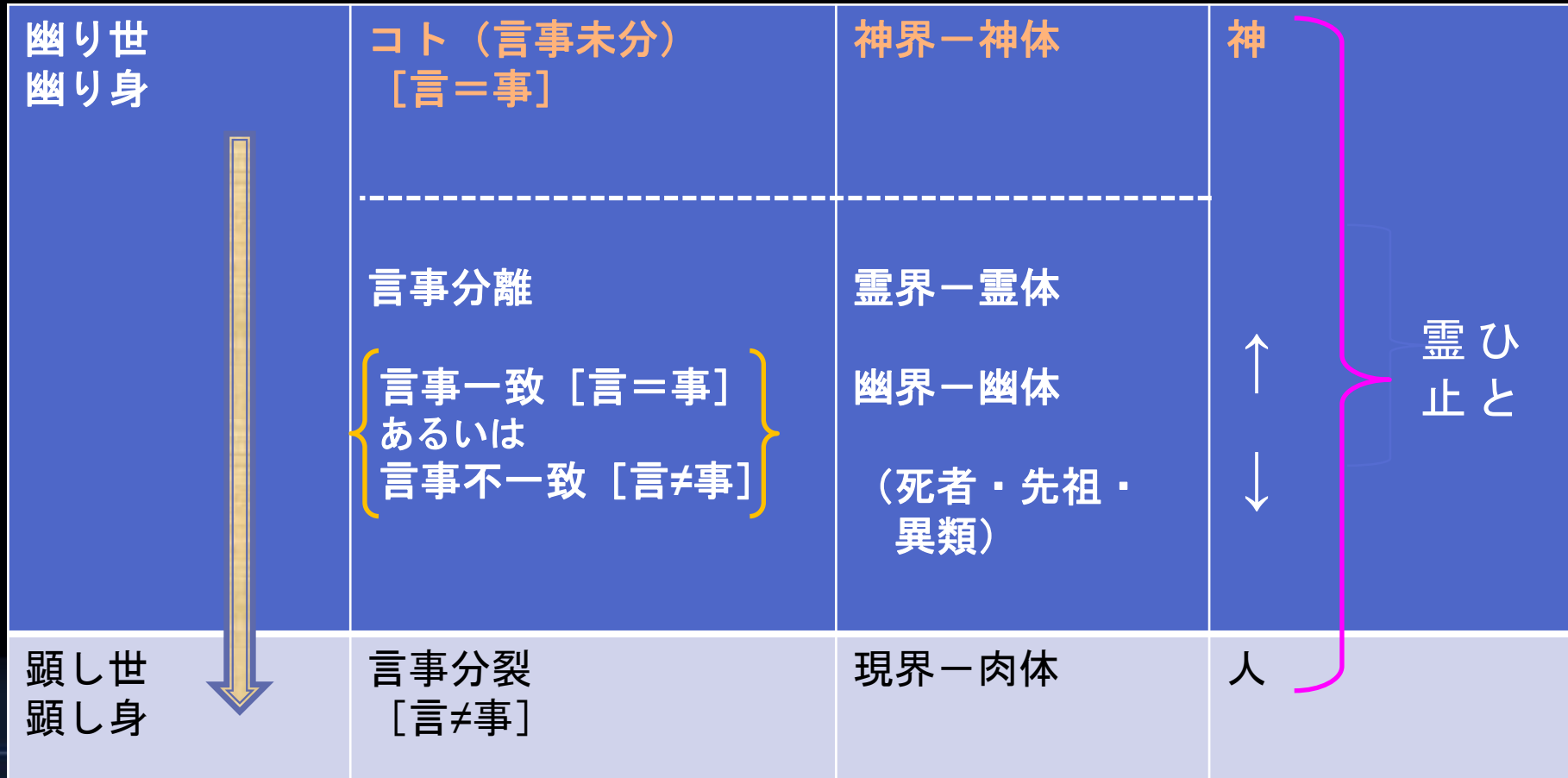
現つ・現実

正気・正常

意識・顕在意識

現在

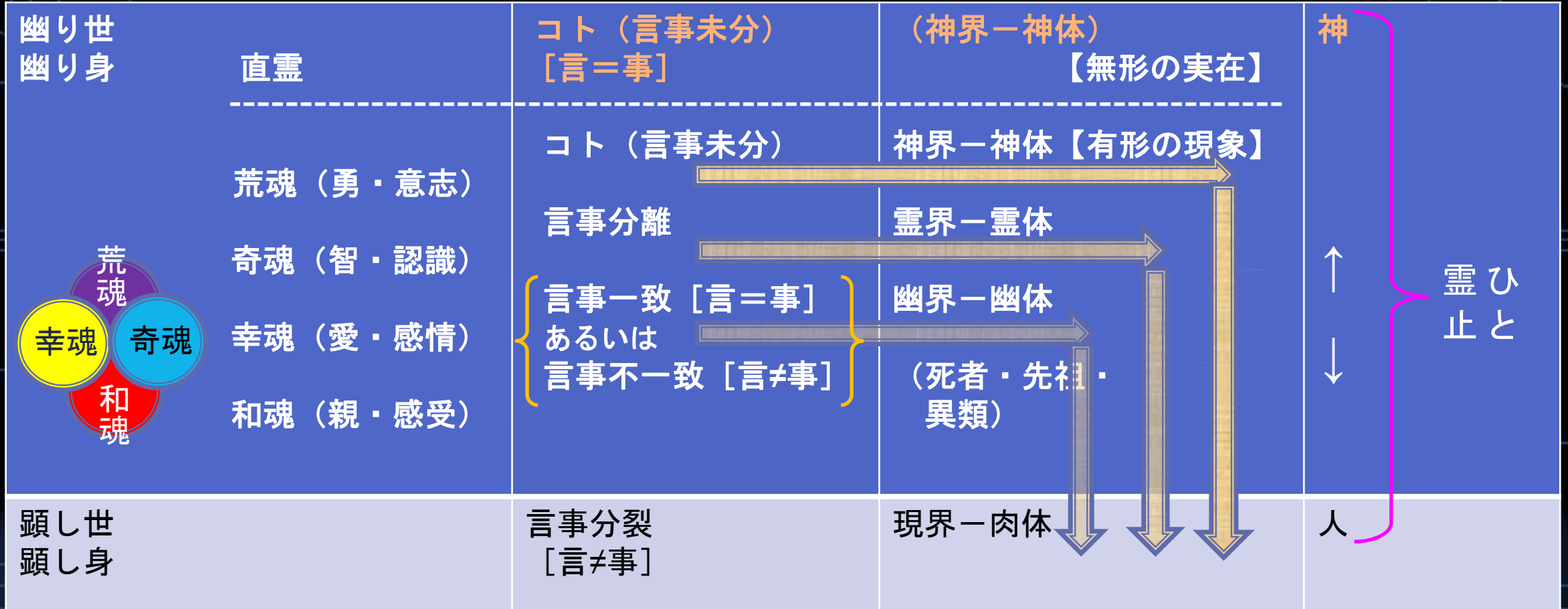
(否定しえない実存的事実)

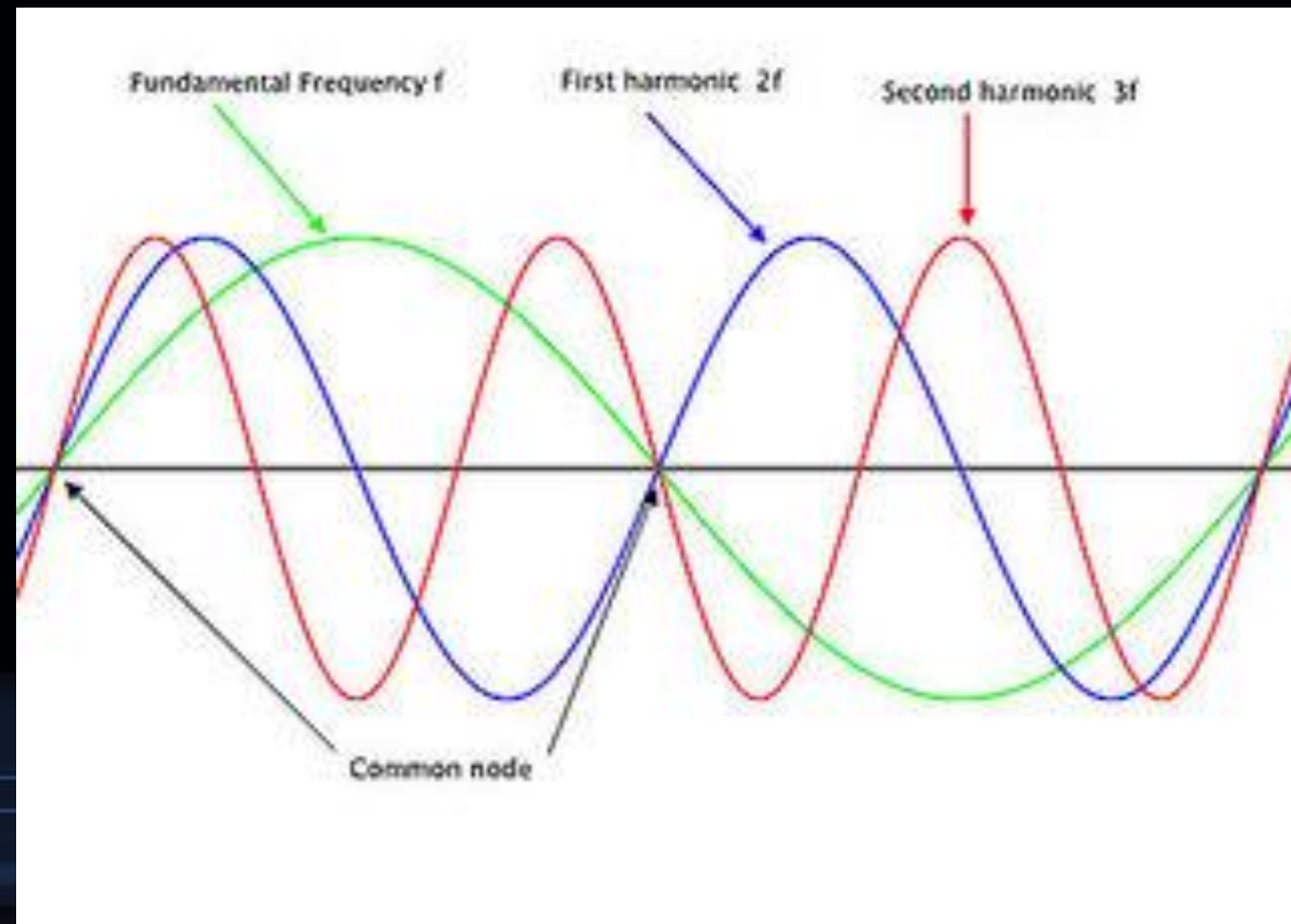


「顕し」は、実は「幽り」を顕し出している！

人(霊止)は、「幽り」と「顕し」の両界に同時に跨がって存在している！

【本田親徳の一霊四魂説】





## (5) 「言の葉」言霊と「言端」言霊

- 顕幽分離の境位で、**言事合一**を実現する「言の葉」言霊 (雅語・和歌)
- 顕幽分離の境位で、**言事分裂**を増殖する「言端」言霊 (俗語・日常語)

言葉と出来事 …… 「事」後的に、言葉が出来事を象る(模写する)

(おのずから**なる事**) (内言・外言) 言  $\begin{matrix} \xleftarrow{\textcircled{1}} \\ \xrightarrow{\textcircled{2}} \end{matrix}$  事

言葉と行為 …… 「事」前的に、言葉が行為を象る(惹起する)

(みずから**なす事**) (内言・外言) 言  $\longrightarrow$  事



# 想念（知・情・意）に対する言葉の関係

- 言葉は、様々な想念(思考・感情・意志)に付きまとう随伴者であると同時に、それら想念を象る鑄型でもあり、また想念を吸収する吸い取り紙でもある。言葉の内に様々な想念が吸収され、絡め取られる。

※とりわけ、言葉の定型(詠歌)がひたぶる想いをその鑄型の中に摂取して鎮魂すると見たのが、江戸中期の国学者・富士谷御杖による言霊(倒語)歌論。

たとえば、「あお」と発声すれば、その音に纏わる知・情・意(思考・感情・意志)が呼び起こされ、その「あお」の内に想念が吸収されると同時に、その「あお」が呼び起こした様々な想念の上に、新たに「あお」の響きが上書きされ、上塗りされる。

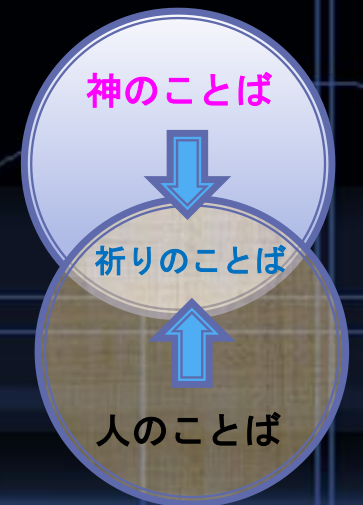
# 言霊発現の具体例

- **ことばを浄める**・・・ことばをその根源から発する言霊によって。清く(清音)、明く、正しく、直く。
  - ①自我中心の態勢を解除して、**無我無心、無私**となる。ゼロ・ポイント・フィールド。「**中今(なかいま)**」。
  - ②その無なる霊性の場に**中心軸**を建立する。**アオウエイ(母音)**が天之御柱(扶桑樹)。開音節。
  - ③その中心軸からことばを発する。父韻と母音が合わさって子音が生まれる。  
言霊宇宙の創成 = 現実宇宙(内なる宇宙 + 外なる宇宙)の創成。既存の言語宇宙 = 現実宇宙を書き換える。

- **祈りのことば**・・・本来は**神のことば**(神語り、物語り、神話、神託、神憑りのことば)であった。その一部が独立して祭祀の場での祝詞や寿詞、あるいは呪能・芸能の呪詞や呪文や万歳などになった。  
祝詞の宣命体(神から人へ。末尾が、「宣(の)る」と奏上体(人から神へ。末尾が「白(まを)す」)  
祈りのことば ⇒ **祈りの定型句。根源語・聖音。**

オーム(AUM)、アーメン(然り、本当に)。オーム・マニ・ペーメ、フーン(ああ蓮華の上の宝珠よ)、南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経、キリエ・エレイソン(主よ、われを憐れみたまえ)、とほかみえみため、ラー・イラーハ・イッラッラー(アッラーの他に神なし)、世界人類が平和でありますように、等々。

神のことば(最初に発したことば)と、人のことば(最後に残ったことば)が融合・一体化して、「祈りのことば」が誕生した。



### 3 言靈に於ける「言葉の発生」と「宇宙の創成」

- (1) いろは歌、ひふみ祝詞、カタカムナのウタヒ

#### いろは歌

いろはにほへと ちりぬるを	「色は匂へど 散りぬるを」	(諸行無常)
わかよたれそ つねならむ	「我か世誰ぞ 常ならむ」	(是生滅法)
うゑのおくやま けふこえて	「有為の奥山 今日越えて」	(生滅滅已)
あさきゆめみし ゑひもせす	「浅き夢見し 酔ひもせず」	(寂滅為楽)

#### ひふみ祝詞(ひふみ祓詞)

ひふみ よいむなや こともちろらね  
しきる ゆめつわぬ そをたはくめか  
うおえ にさりへて のますあせゑほれけ(ん)





祝詞の言霊

しふみ祝詞

カタカムナのウタヒ(全八十首)、第五首・第六首・第七首

第五首      ヒフミヨイ   マワリテメクル   ムナヤコト  
                 アウノスヘシレ   カタチサキ  
第六首      ソラニモロケセ   ユエヌオヲ  
                 ハエツキネホン   カタカムナ  
第七首      マカタマノ   アマノミナカヌシ  
                 タカミムスヒ   カムミムスヒ  
                 ミスマルノタマ



## ■ (2) 古事記、古史古伝の「神話」

古事記—上つ巻（神話）、中つ巻（神武天皇～応神天皇）、下つ巻（仁徳天皇～推古天皇）

上つ巻—（別天つ神五柱、神世七代、伊邪那岐命と伊邪那美命、天照大神と須佐之男命、大国主神、葦原中国平定、邇邇芸命、火遠理命。）

「天地初めて發けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。この三柱の神は、みな獨神と成りまして、身を隠したまひき。次に國稚く浮きし脂の如くして、海月なす漂へる時、葦牙の如く萌え騰る物によりて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。この二柱の神もまた、獨神と成りまして、身を隠したまひき。」

# 参考文献

- 棚次正和 「「言霊」試論」『宗教哲学研究』第1号、京都宗教哲学会編、北樹出版、69-84頁、1984年。  
(コト論とタマ論を交差させて言霊論を展開した習作的な第一論文)
- 棚次正和 「第7章 5 顕現と宣言の分立以前—言霊の地平」『宗教の根源～祈りの人間論序説』、世界思想社、277-284頁、1998年。  
(宗教現象としての顕現と宣言が分立する以前の地平に言霊を探究した論考)
- 棚次正和 「『声字実相義』への言語論的接近—意思伝達か、世界創造か」『高野山大学密教文化研究所紀要』第22号、1-25頁、2009年。  
(空海の『声字実相義』に言語論的に接近し、言語の原初的機能を世界創造に求めた論文)



ご清聴 ありがとうございます